續史籍集覽

義疾後覺二

69
50
8

東京圖書館
門類 六九函 架 九〇8號 冊

義殘後覺卷四

目錄

一賀茂河原にて喧嘩の事
一果進居士の事
一備中高松城事幷和睦事
一豫州大津働の事
一大蛸の事
一八彦盜賊を討事
一遠野尋入討死の事
一雲州下口軍の事

義殘後覺巻四

賀茂の川原にて喧嘩の事

爰に中國より出たる侍に里見の强大夫善助と云牢人あり京にゆかりありて志はらく五條の邊に有けるが五月一日賀茂のあしそろへ ふりとて京都邊内より袖をつらねて行ほどに善助内々田舍にてもきゝ及びける事なればゆきて見物せんとてたそつれをもとめて行はやとおもふ所にこゝにあたりに宜雲といふて一人の針立ありこれも其いにしへハ名ある人にてありけれども世をうらみて今程ハひつそくして療治などを身の業として朝夕をくらせりこの人を同心して一トあひつれてゆくほどに見物しおはりてのちかも川の中島に座をとつて持せたる瓢簞をひらきてたゞ二人みやこあたりの景ふどを四方見はらしてふにこゝろもふく物語して慰ける所に爰に津ノ國の住人に生田金内中村源次兵衛とてありけるが二千貫三千貫の身上ふりける人の子息たるによつてよき侍十四五人づゝめしつれ道具をかつがせてあしそろへを見物してのちべんたうをひらか

んとて河原へいでゝ所を見まハるほどに金内申されけるハあの中島の出さきハ一ふつのところなれどもはや人のあればちからなしいざや川むかひへうちこさんといへば源次兵衛申されけるハなんでうほくせうのほうしばらかれ二人かもちたる河原にあらはこそいざ〳〵といふて河をおしわたりて善助がそばへおしならべてせんなぞしかせにける宜雲もよしすけも是をみるに身をもちたる殿ばらなるがいづくより出たる者どもなればはうもしらぬ傍若無人のやつばらかなとおもへども立てのかんもさすがにてよそめしてこそゐたりける時に源次兵衛申されけるハ見申せばかた〴〵ハいふうなるへうたんをもち給ふ物かなさだめて中もよく候ハんそつじながら一盃ふるまひ給へのみ候ハんといひければ強大夫申されけるハ見申せばおの〳〵ハれき〳〵の御さふらひ世にあるかたにて候人かずならぬ我らがあさましげなる持參のうちいかでかのぞみ給ふべきかた〳〵の御持參こそ御ほうしにあづかり申たくぞんづれとそ申されける源次兵衛これをきゝてなんでうわかきものゝ所望しかゝつてのまでハむなしくやむべき是非たまはらずハをしかゝつてのみ候ハんとぞ申けるよし介是をみてその義ならばやすき事いかでかおしみ候ハんとてへうたんもつてかゝりさかづきをあてがふたりときに源次兵衛此盃ハかひなしいかにさふらひども弁當のうちなるめしわんいだせと申て是にて九分にうけて一口のみて申やうハへうたんの見事なるによつてさけも定てよからんとおもひせつかく所望しつればさん〴〵のさけにてくちをそこなふたる事よとて河の中へくわらりとぞすてにける強大夫是をみてもとよりかくこそあるべけれと思ひければ少も色をみせずをししづまつていふやうハ右に申あぐるごとく我ら體の持參仕る酒なればいかでか御むしにあふべきその義ならば御ぢさんのさけをばそれがしにたゞ一はい下され候へのみておもひいでに仕らんと申源次兵衛是をきゝて侍どもさけいだせとてめしわんにてそのませにけりよしすけは十分にうけて一くちのみて申やうハさても〳〵かゝるけつかうなる御酒ハ我ら一世のうちにたべたる事ハ候ハずのみつけぬものをのみてハ腹中いかゞ候はんとてかたひざをしなをしさまに源次兵衛がつらのたゞ中へうちつけあをのけにとつてふせむな板をひざにてつよくおさへ壹尺

七寸三條久國うちのわきざしぬけばたまちるばかりふるを小腹にあてがひけるほどに源次兵衛ハこの酒めはなくちへ入ければからくむせていきをせんとおもへばむふ板息のきるゝばかりにおされてきもたましゐもふくまふこのしろくろするばかりふり宜雲これをみてさつそくおりあひ ともに源次兵衛がたぶさをとつて脇指をぬきすかしてぞゐたりける金内そのほか侍ども刀のつばもとくつろげていさみかゝらんとすれども里見ハちつともさハがずふんぢらあたりへよつてけがするふさもあれをのれハなにものふればかゝるらうせきをのぶとするぞふのれきかんとぞせめにける金内ハすけんとすればさしころすわびてもはふすべきハふし身體どをうしふひけうをさましてゐるほどにあしそろへの日なればきせんくんじゆハかもの川原に市をふすをりふし松永彈正ハかへり足に此ありさまを見給ひて何事ぞみてまいれと仰けるほどに立よつていかふる子細ぞたづねてまいれとの仰にて候と申されければ宜雲はじめおはりをつふさにかたりければたちかへりてこのよしを申上る松永きゝ給ひて其義ならは雙方ともにつれてまいれと仰られて三十人斗つかはし給

へば兩方ともに御館へ參りたまふべしさあるにつゐてハ腰物あづかり候ハんとてこと〳〵くとつてぐしてまいる彈正少弼雙方きゝ給ひて言語道斷の曲者かふ一所をも知るほどのものが世をもはゞからでかゝる乏少のやからを己が威風にまかせて耻面をかゝする事狼籍法に過たりとて急兩人をば三好長慶入道へおくり給へば二人ながら法師にふし五畿内を追放したまひける強大夫は無體雙の手柄を神妙につかまつりたるとて殊外かんじ給ふ宜雲ハそれより不斷御前にめされて御扶持をぞかうぶりにけるさて里見ハこの手がら世間に流布しければ因幡の國守へ三百貫にて許容したまひにける

果進居士か事

中比くわしんこじといふ術法を行者あり上方へとこゝろざしてつくしよりのぼりけるが日をへて伏見にきたりぬをりふし日能大夫勸進能をしけるか見物のきせん芝ゐの内外に充滿せりくわしんこじも見物せばやと思ひてうちへいりて見けるにふか〳〵上下の見物人ハ尺地もすかさず立込たりくわしんこじまぢか

くよつてみるべき所もなければ爰ハ一ツ芝居をさはがせて後いらんと思ひて諸人のうしろに立ておとがいをそろり〳〵とひねりければみるうちにかほのなり大きになるほどに人〳〵是をみてこゝなる人のかほハふしぎなる事かないまゝでハなに事もなかりしがみるうちにほそながくなる事のふしぎさよとおそろしくもをかしくもこれをたちかゝりてみるほどにくわしんこゞハ少かたはらへ志りぞきけるが芝居中ハうへ下もちかへして入かはりたちかはり見るほどにのちにハかほ二尺ばかりながくなりてければ人〳〵けほうかしらと云ものはこれなるべし是をみぬ人やあるべきすゑのよの物がたりにせよやとておしあひへしあひたちかゝるほどに能の役者も樂屋をあけてぞ見物しけるこゞハいまハよき時分と思ひければかきくれてうせにけりみる人こハいかにきたいふしぎのばけものかなと舌のさきをまきてあやしみけるさてくわしんこゞハ芝居こと〳〵くあきたるによつて舞臺さきのよきところへあみがさ引こみて座をとりて見物おもふさまにぞ志たりけり又中國ひろしまといふ所に久しく居住志たりけりそのあひだある商人の金銀をかりて

事をとゝのへけるがのぼりさまに一せんも返弁せず志のびて京へきたりけるがこのあき人にくき居士かないつちへかにけうせたるらんとくやめどもかひなくしてうち過けるがあるとき商買のために京へ上りけるが鳥羽の邊にて此くわしんこゞに十もんドに行あふたりあきんどそのまゝこゞをとらへてさても久しき居士かなそれにつけて御身ハずいぶんそれがしちそうに思ひてきん〳〵其外ひかへ候てとかくといたはり侍りしかひもなく夜ぬけにして上り給ふことさりとてハとゞかぬ御心中にて有ものかなとはぢしめければくわ志んこゞ何どもめんぼくなくや思ひけんこの人をみつけぬるより又おとがいをそろり〳〵となでければかほよこふとりてまなこまろくなりはなきわめてたかくむかふ齒一ばい大きに見えわたりければこのあきんどもこれハと思ひけるが居士申けるハなにと仰候やそれがしハかつて御身ハぞんぜぬ人にて候がまさしきちかづきのやうに仰候ハおほつかなしと申ければあきんどはじめハくわしんこゞとたゞしく思ひしがみるほど各別の人なればさてハ見あやまりたるとおもひてまことにそつじなる事を申侍るものかな我らがぞんド

たる人かとおもひて見あやまりしがやるし候へと申てとをりにける後に人〳〵風聞してこれハ何よりもふらひたきぶやつかりとぞわらひにける又あるとき戸田の出羽と申兵法者無雙のきこえありけるがもとへやきてちかづきになりぬさていろ〳〵さま〴〵物がたりをしけるほどに居士申けるハそれがしも兵法を少心がけ申候さのみふかき事もぞんぜねどもよのつねの人に仕負候ハんとハおもはずと云戸田きゝ給ひてそれハ奇特ふる事にて候そのぎならばちと御身の太刀すぢがみ申たく候と申されければ居士さあらばとて木刀をとつてたちあひやつといふと思へばこびんをちやうと打出羽ハ夢のごとくにて更にたちすぢも覺えざるかり今一度といへばこゝろへたるとて又うつに右のごとし戸田ハさりとてハ御へんの太刀ハ兵法のうへにハはふれてぶやつだうをおこふふによつて各別の法なりとうちわらひにける其後申されけるハなにと御へんに八はうより立かゝつてうつときにも身にはあたるまゞきかとといければ思ひもよらぬ事と云さあらばとて十二疊敷のざしきへ弟子ども七人わが身ともに八人くわしん居士を中におきて坐敷の四方の戸

をたてゝうちけるにやつと云と思へばこゞハくれに見えずこはいかにと人〳〵あきれてくわしんこゞ〳〵とよびければやつといふいづくにかあるらんといへばこゝにあると云座敷中にはちりもなきによつてさあらばえんの下にかゞみゐるからん證據のためにみんとてたゝみをあげてくわしく見けるにふにもふしくわしんこゞとよべばこたふるさりとてハきたいふしぎともいふばかりなしと人〳〵あきれはてゝゐければまん中へいでゝふにと尋ね給ふぞやといふ人〳〵さりとてハとかういふばかりふしとかほをまもりゐたりかゝるうへハたとへば百人千人よりたりともかふふ事にあらずといひてうらやみにける

備中高松城事并和睦事

幡州の諸士等羽柴筑前守年をへてたゝかひたまひけるが終にハ各うち負て筑前守召（本マヽ）幡州を領し給ふそのせい一萬五千にて備中の高松の城をせめ給ふに城主よき覺えの者どもをあまたもちたりければ種々のてだてをほどこすによつて人數ことのほか損じければ秀吉公かくてハかふふべからずとおぼしめして山岸を

きりくづさせて大河をせかせ高松の城へ志かくるによつてほどなく城中ハ水そこ
にぞ見えたりけるたけき武士どもいへども詮かたなふくてあつかひを入て城をわたし
ぬこのいきほひによつて近江ノ上原が城も羽柴へかうさんするよしきこえければ
輝元公貴族諸臣をあつめて評議ありけり信長家臣羽柴筑前と云者累年
うき田家播州三木神木等をはしめさして所々を追伏しこのごろ當家の領
國へこゝろざす敵をあふぐつて猶豫油斷に日ついやし高松をおとさせらるゝに
上原等はたをいるゝ事是ひとへにかたきをかろんずるよりこゝおこれり所詮大軍
をそつしてうつて出羽柴をうちとり領國のさかひに城をこしらへ毛利兵庫守
元安公をするたてまつりて志かるべからんと評定して小早川左衛門佐隆景
吉川福原益田等をむれこの大將として都合五萬餘騎海陸よりも攻上るの
よしきこえければ筑前守きたまひてやがて播州さして引退給ふさて信長公へ
飛脚つかはし給ひけるハ毛利家の諸將五六萬のぐんせいにて罷出る事急ふ
り急加勢を三萬はかり早速給ハるべし御遲參においてハそれがし滅却うたがひ

なしと申上られければ信長公その義ふらは人數をさしつかはすべしとて織田
三七どのを大將として明智日向守光秀に一萬五千の人數をそくだし給ふ
ときに日向守よき折からと思ひとつて信長公父子をほろぼしたてまつるとて
日向守ハ小早川隆景吉川殿兩所へ飛脚をそまわらせけるさんぬる六月二日に
信長父子惡逆無道の大將にて萬民のうれへ一日もやむことふきによつて其愁
鬱をやすめんがためにうしなひたてまつる志かれば羽柴筑前西國おもてに累年
罷有て人數ほろぼし國をうばふの間それがし近日追罰のために西こくへ發向
仕るべしさあらば御領國御手分あるべし中にはさみて羽柴にぬきあしさせず討
取申べし其上ハいかやうにも御望に應じ奉るへきよしを申つかはしけるに運の
つよき大將のさろしにハ此ひきやくをさらへて筑前守どのへまいりけるこの狀を
一間所にてひそかにさしめしてそのひきやく討てすて給ひそのゝち小早川吉
川殿へ和睦のむねをさゝやゝ申給ふにかく信長ほろび給ふさハ夢にも志り給ハ
ざれは當家の領國だに無事なるうへハ別義あるべからざるの評議にて和睦志給

ひける筑前守殿大きに安堵し給ひてさあらば日向守を追罰すへしとて幡州をうつたち給ふ山さき表淀にいたつて日向守うちまけしかば秀吉公亡君の追善に本懐を達る事大慶におぼしめしそのゝち柴田修理亮はつせんとて越州へ出陣し給ふ柴田きゝ給ひてきのふけふさてそれがしが沓ぬぎにはいまわりし木下藤吉郎が我に弓をひかんといふ事とうらうがをのふるべしそのぎからは急いて手ふみを思ひ志らせんとて討立給ひ志づが嵩に陣をとり修理亮の甥に柴田玄番五千の人數にて餘湖のうみのみきはなるほそみち三十余丁をへて陣を取秀吉公の先手中川瀬兵衛を打取けりさて筑前守本陣をおしつけ給ふに柴田申されけるハ玄番に其場をはやく引とり候へそれにありてハ軍負にふり候よし三度まで申つかはし給へども玄番ハ中川を討取たる利に乘てこの義をもちゐず修理どのハそれにひかへ給へ御身のいくさハ古風にて當時の風にあはざるよしを申て引とらざるこそ柴田の家運つくる所とハ後にぞ思ひ志られにけりかくてよこのみきはにて合戰はゞまり兵手柄をつくされける加藤虎助加藤左馬介

福島市之丞をはじめとして已上七人よき武者を討取九人すゝみいづるうちに櫻井左吉金森權六ハ討死せり柴田玄番ハこゝにて生どられて京へぞのぼされける老功の修理亮つもりに少もたかハずと後にハ人〳〵さたしたるふりさて秀吉公ハすぐにおしつけ給へば柴田は玄番さん〳〵にうちまけあまつさへ生とらるゝよしをきゝ給ひて家運のつくるによりてみる穴へおつるとハこれぞかし下知をきかざる玄番が志つる事よとて氣をくさして本城へ歸陣せんとし給へどもてき押つゞきて見えければたやすくのがるべきとも思ハれずかゝる所に毛授少介三千にてそれがしふみとまり一さゝへつかまつらんあいだその間にのかせ給へと申によつて少助におさへさせ修理亮はほんぞやうへとぞのき給ふさるほどに少助ハあとにとどまつてみ事なるいくさしてうち死志たりけりそのゝち柴田もほろび給へば秀吉公の威光ハ已のときとぞかゞやきける

與州大津の働の事

おほつの城へとりかけ給ふときうちよりもめん〳〵の志るしを指たるけよき武者

五十人ばかりもんをひらかせてついて出る古志木梨の人〳〵すゝみて見えけるが
まづ古志殿へ騎馬武者三十騎ばかり馬を乘はふし〳〵得道具をひつさげてか
けむかふたがひに名字をふのつてつきあひきりあひくみあひて勝負をするほどに
三宅新右衛門赤おどしのよろひきたる武者高もゝをつきつめくびをとつてぐし
たる侍に深治と云者有けるにもたせけりさてかけ入て志かるべからん武者かふと
見合する所にほうばいの白木源介と云者黒革おどしのよろひに三枚かぶとをき
たる大武者とおしふらべてむんずとくみけるが白木ハくみしかれてすでにくびを
かゝれんとするところを新右衛門急度見てあはうたるゝと思ひければおりあはむと
かけよる所に吉彌と云て十八さいにふる傍輩の子めてのかたにありてさん〴〵
にうちあふいづれ人と思ふか花のやうふるわかきものをうたすべきかと思ひければ
このかた人すけてたすけんと心ざすほどにめての武者にいひけるハやれそこふうろ
たへものふんぢはまふこくらみけるか味方うちをする事諸ほうばいのち志よくふら
んとたばかりければこの武者いふやうさこそ思へどもわれに組かゝるによつて是非

ふくゝみふせぬまふこをあきて軍をせよとて引おこしてさりにけりさて新右衛門
ハ吉彌がかたきに落あひつきふせくびとらせにけり古志どの馬上にてこれをよくよ
く見たまひてさりとては三宅新右衛門一ばんくびをあぐるてがらのことはさて
おきぬ敵味方入みだれいづれをそれともわきまへがたきにゆんでめでに味方の死を
かゝへてくひふせらるゝをたすくる智略吉彌か命をすくふのみふらずあまつさへ高
名をさする事千騎に一騎とはふんぢならんかしとて大きにかん〳〵給ひて一の
高名にぞ成にけり事落着して歸陣のゝち脚氣をわづらひ久しく養生してあ
られしときわかき人〳〵はう〴〵よりきゝつたへてまいりせんぢやうのはたらき心
得やうをあれくれのぞみてきゝし人おほかりけり又宮口竹内山内ふど無比類
高名せしふり其うちに宮口はきちんかへしのひたゝれに黒革おどしを着たる武
者をくみふせしが甲をとつてくびをかゝんとせしに志のびのをたやすくとられざ
るによつてとかくとするうちにむかふよりも頸なりの甲きたる武者鑓ひつさげて
きほひきたるこれはさだめておちあはんと思ふにこそつかれてハあしからんと思ひ

て甲越にくびをかきゝつてさしあげ立あがらんとしければこの武者まちかくよつてこのくびをきつと見てこれはわか主にてはふしいづちにかおはしけるやらんとかいふいてぞはしりけるこの者はおのが主をとりはづひてたづねまはりしがそれかと思ひてきたれどもわが主にてはふきによつてのきたると見えたりやさしき者かなとほめしふりそのとき甲ごしにくびをかくとて左の大ゆびをかきおとしけるおよそこのかつせんほどあら勝負はふかりしなりさりふがらいづれも度々のかつせんにばかずをふんでかたきみかたの色あひをさとつてかけひき志ふれたる功兵ふればいづれのかつせんにてもそのほまれふき事ハふかりしふり

大蛸の事

爰に丹後のくにゝ奇妙ふる松あり一はうはさうかいまん〳〵としてきわもなしみきはのかたハ青りんがゝとそびえて苔ふめらかふりこのいはほの上に彌々うへにありてえだ葉うみのうへゝふげかけたりこれいかんと申にちかきころの事なるハ六月ふかばに大蛇の山よりいでゝこの松にまとひつきてこうをほしてあそべりそのたけは

十五六ひろもありぬべしまふこくちぎはのすさまじさハものにたとへんかたふしかゝる所に海中より大ふみこふみけだてゝきほひきたるものありふにふるらんと見ければそのあたまは一けん四はうをまろめたるほどふるたこの八の手をうちかけ〳〵大ふみこふみおしきつてこのいはほのかたへきたりて大じやをきつとみていかにして是をとるべきき志よくふり大じやはまたこのたこをみてとつてのむべきけしきふり雨はうたがひにねらひあひけるがふにと思ひけるやらんたこハすこし志りぞくやうに見えけるが大じやはとびかゝるき志よくにてかしらをさしのべ手をいだすところをたこハへた〳〵とてをいだして志やをまきけりじやはたこのあたまをくらいつかんと手をのぶる志かれども志やはこの松を五まとひほどまとふたこは又じやをハツのてにてひた〳〵とまく蛇はたこをまきあげんとすたこハじやをうみへ引おとさんとすたこのちからやつよかりけん松ともに下へ引おとし海へつゐに大じやを引こみけるなかにてハ志やをふにとしたるも志らず松はこのときねをかへしてけり志かれどもかたえだのかたふるねのいさゝかいはにとり付て大木となりて枝葉さか

へけりよのおかにたこといふもの大なるは有といへどもかゝる大じゝやをまきこむほどのたこいつゝにわがてうにてきゝをよはずある人のいはくふねにあやかしといふものうくさきいかいしきふねがうごかずしてなにごともならずめいわくする事ありそのあやかしといふは此たこふりといへり龍虎のせうぶいありとむかしよりいへどもたこと大じゝやの勝負はまことに珍しき物がたりなればこゝに記すふり又四こくへんろ志たる人のいはく四こくのうちにて雨のはれまにみきはのかたへいでゝ空のけしきいかゞあるべきと同行どもみる所にあけ野に乘たる船頭のなふたび人たちはやくおはせよきさくふる事をみせんといふほどに蓋はらを二三げんがあひだふみ分て舟にのりてみければ ふかさ六七尺もあるらんとみえける大くちふわの水中にてきりきりさまふ事よのつねふらず半時はかりまふでけれは筒中さおぼしきところほうろくの大きさにまろくふくれりふしぎやと見る所に又きり〳〵まふほどに志はらくありておさきニッづゝにさけたりみればて四ツにふりけりそれより又まふ事やゝ志ばらくありて四ッの手さはさけて八ツになりたりめだゝきする 内にこのくちふ

わ蛸さなりにけりそのうち沖をさしておよぎやきしふり人〳〵さてもふしぎふる事をみつるものかなかゝるこさもあるふらひかやさてよく〳〵みおきてものかたりにせたりけり

八彦盜賊を討事

中ごろ越州に八彦の近光さ云人ありけり此人父治部大夫さいふをはごうぞくのためにうたせ給へり石根のさひろもんさてがうたうを所作さして世をわたりけるがそのよ同類數百人志たがへて方々をまはりてうちさりはぎさりしけるほどにあるさき治部大夫他所へうちこえ夜に入て山中をさをりけるにおりあひてさんざ〳〵にうちあひたせいおれはつゐに討さられ給へりされば近光いかにもしてこのいはねをうつて父の敎養にほうぜんさあけくれはかり事をめくらされけれごもまづ一所にさだまらずそのうへ用心よのつねならず與同をうち志たがへてかりにもよそめをふせてあるさきくふれはおにたよりてちかつくべきやうふしされはさてかれをうたで亡父の鬱念をむふしくせんもくちおしさてあるさき 一間所にいつてつら

〳〵手だてをあんずるところに爰にこのりやうふいにそのとし月をふりたる狐あ
りけるがはたちばかりの女房とげんじてこつぜんときたり申やうはいかに君ハひ
とりとふかく御心にもの思はせ給ふ事のあはれさよと申ければ近光見給ひてな
んぢはふにものぞと申させ給へばさん候みづからはふにをかつゝみまいらせんこの御
りやうふいにいく年をへたるきつねにて候が君の父のかたきをうたん事をあけく
れ工夫おはします御こゝろのうちことにあはれにぞんじ侍るまことにかれをうたせ
給はん事ハたゞやうくわうごうはふるともかふひ給べからずされども我はつうりき
を得て侍ればかれがあさ夕の有様を日ごとにぞんじ侍るいたづらに御こゝろをつ
いやし給はんよりみづからをたのみ給へこのみたちの地にて子どもをあまたまふけ
候へば御父の御事をば氏のあるじとおもひたてまつるにふさけふくもほろぼし侍
るそのにくみは畜類ふがらもいかばかりとか思しめすかれをうしふひておやのけ
うやうにせんと思食候はゞみづからあんふひ仕らんどぞ申ける近光大きにえつき
をし給ひてかゝるよろこびこそ候はねそのぎふらばうつべき手だてをはからひてきか

せよとの給へばさん候此とひゑもんハ常に白拍子をこのみ候へばみづからを上方
よりくだりたるしらびやうしのめいぢんとふうぶんしたまへばさもあらばかれがきゝ
をよびて人をたのみよび候べしといひければちかみつ一段しかるべしさてよびてのち
はいかんとあればよき時分をみすかしてみづからたよりをすべしそのときあやしき
田夫にまぎれて支度しておはせよと申ければさても〳〵有がたきこゝろざしかふ
この世ふらずおもふぞとてかたくちぎりてぞかへりにけるさるほどに此きつねはある
くれがたにようがんうつくしき美女とふつて下女ひとりうちつれてぞきたりける
あたらしとのにうつしたまひてさてむら〳〵さは〳〵へ都かたよりもしらびやう
しのこの所へきたりたりのぞみふらんものはよびて見物すべしと流布し給へばあ
んのごとく岩根はきゝてたうけの向丸がもとへかゝる事を聞こよひこのものよびて
これにてみばやといひければさらはしのびてよび候はんとて白拍子をぞよびよせけ
る岩根は郎従等十よ人ぐして上座にすはりてこの女ばうをみるにふか〳〵か
たちうつくしき事いはんかたなしさすがにみやこあたりをめぐりたるものふればに

やかばかりおんじやうにやさしくはあるらんとみれども〳〵目かれせずかくて舞
をはじめけるにおもしろさいはんかたなしそのゝち夜もすがらさけをすゝめけるに
興ある事身にしむ斗にありがたくぞ思ひにけりそのゝち人をまいらすべし身がも
とへをハし候へといふてかへりけり志らびようしハもとよりかれがもとへやくべきはか
り事なれば向丸がもとにゐたりけりあくる夜に入てむかひをこしければ下女う
ちつれてゆきぬはる〴〵深山へいりて大きなるいはほのうろのうち二十けんばかり
あるうちにぞ入たりける志らびようし申けるはこれハ思ひもよらぬ志んこくにすま
せ給ふものかなあれものすごくうたてしき所にこそと申ければさおぼしめし候は
んそれがしはよのつねのものならすよをきろふものにて侍るゆへかゝる所をもとめて
まかりあるさりながら何にてもふそくはあらせ候まじとてちそうをつかまつりもて
なす事かぎりなしかくて日をふるほどに十日ばかりありければたこくよりようの
事ありとてよびに人來りければ岩根申けるハ明後日はかへり申候はんそのほどハ
つれ〴〵なりとものこしおくものどもをとぎとし給ひてまちたまへとていでにけり

かゝる隙に志らびようしハ下女をよびて耳をひき志か〴〵いひ付て近光かたへぞ
こしにけるせつなが間にきたりて申けるハ明後日もどり候はんまゝ志たくあやし
きでんぶにかはりておはし候へと申ければこゝろへ候とて日のくるゝをぞまち給ひ
にけるさるほどにちぎりし日にも成しかば近光は簑笠をき給ひ下には重代の打
物をさして手にはまさかりをもち給ひおとらぬつわものをおぶじやうにこしらへて
三人つれて山中へぞ入給ふ志かれどもいつちをどなたへとも方角をわきまへかね志
ばしやすらふところに一のくつねハ來りて近光をまねきければ心得給ひてかれが
やくやうにおはしけるほどに程なく付給ひけるそのときくつね申やうハかれが住
けるところにはわかきものども四五人留守をつかまつり侍るあひだこの所に待
給へと申ければこゝろへ侍るとて岸のねがたにぞまち給ひにける去ほどにとひゑも
んはかへりきたりていかにつれ〴〵におはし候はんといへばまことに御かへりをまち
つくし侍るぞやといとけうありてぞ申されけるそのとき志らびようしハつうをもつ
てかれが玉志いをかすめけるかくて申やうハみづから是になが〳〵侍るにより

て宿よりあやしみをふかして方々をたつね申侍るよしをふしぎにもおもに見はんべるまゝさことへかへりてそのゝちまいり候はんさいへばいかでかもどし候はんこの所を人にふかくかくし申候へば御身をもどし候ひてハよの中の人志りまいらせ候はんまゝ叶まじさいひければ志らびようしかゝるふんぎふる事を仰らるゝものかふいかでか人にもらし候べきふれどもさほどきづかひなしたまハゞ尋ぬるものゝむかふの岸かたまでまいり候まゝあれにてあひ申たく候ほどにやらせ給へさいへば岩根はさほどにおぼしめし候はゞそれがし御ども申さんとてきにたつてそあやみけるほどふく近光の待かけ給ふこゝろへぞやきにけるされはいはねは玉志ぬなぬかれけるにやこの三人の人〳〵をようがんびれいの女ばうとみて云やうは女郎たちはむかひのためにきたり給ふかあやしやさいひければ近光はやがて心得給ひさてはまふこのくらみけるにやさゝつて物かげへまいりてみのかさひんぬいてうちものぬきさまにたゞ一うちにそ志給ひける近光のうれしさ天にものぼるこゝちぞし給ひにけるさてかへり給ひて人数をよせかの残党をさゝ〳〵くめしさり父のけうやうにそ志給ひにけるさてちかみつゝこの孤のさくによらずはいかでかこのよにてかれをほろぼすべき此をんほうずるに物ふくし志やするに所ふしさていそぎほこらにいはゝせ給ひて宮守をつけていねうかつがうし給ひけるためしなき事さそ申ける

遠の源内打死の事

斎藤城州信玄公さたゝかひしさきさん〳〵に入みだれ勝負まち〳〵ふりしにこゝに城州のいろに遠野源内さてちからは十四五人力ありける勇士あり又原美濃守が手に小坂磯之丞さておさらぬ兵ありけりたがひによきかたきさ見あひてかけあはせなのりあひせうぶを志けるに鑓もおきかたものつたりけれは両人いさくまんさいひければもつさもさておしならべてむずさくみうへへなり下へなりくろひあひけるが山のそはにてくみしかはひつくんで下へこけをつるほさに五丈ばかりこけにけるかくして下にをちつきけるが遠野はちからまさりけん磯之丞をくみ志きてくびをかゝんさてこしのかたなをさがすに岸のうへにてくみころびあまつさへ谷へこけまいりし事なれはいたる太刀は帯さりきれてうせぬわきざしも刀

もうしろへまはりてひとつも手にあたらざれば磯之丞下よりすかさず七寸のわきざしをぬきてくさすりのはづれをうしろさまにぐさとつきこふてよりこみければさしも大ちからの源内といへどもきもたましゐもたえ〳〵とふるところをはねかへしおしかゝつてくびをぞとつたりけるよきかたきをうつて高名をきはめ一のふでにつきたりける後にこれをきくに磯之丞申されけるそこのわきざしいますこしふがくばふにともなるまじきがみじかくて命をたすかり高名したるとかたりけるあるべき事にとぞ申あひにけり

雲州下口之軍事

陶入道あるとき一萬のぐんぜいをそつして雲州へおしよするのところに晴久よりも七千あまりのそふへをもつて矢合しける所に初日は陶方かちいくさ二日ハ雙方あひ引にすかゝる所に雲州に妙光寺とて日蓮宗の僧等ありけるがこの葉評議していはくこんどは陶方のいくさかちめに見えたりしかればこのくに無ぬにしてこそわれ〳〵が法も成就すべけれ陶かた利運になりてはいかでかくにゝ安

堵すべきれき〳〵の旦法たち數日苦戰をしたまふに法師ふりとも一はうをたまはつて矢軍ふりともせばやといひけるに若法師もつともとてわれもわれもとおもひ〳〵にいでたつて五百餘人ぞゝろひける弓鑓ふぎふたおもひ〳〵にひつさげて尼子どのゝ陣中へぞまいりける晴久大きに悦喜してこゝろさしこそ大切におぼゆれとてかくしぜいにぞしたゝひける此僧等は左はかはら右は一丈ばかり高き岸なりけるがこのきしのかげに五百よにんかくれゐけりかくてかつせんはじまりてたがひに入みたれせめたゝかふほどに陶入道一千ばかりの人數を旗本にそふへて諸勢を下知してある所へうしろのきしよりときのこゑを一同に三度あげゝればすゑの入道をはじめとしてぐんぜい大におどろきうしろをみければきしのうへよりけよきむしやうんかのごとくおりたつてさしとり引つめさん〳〵にゐるほどにふじかはくづれであるべきぞみふみをさしてはいぐんすせん陣二陣もあせ水にふつてたゝかひけるがはたもとすでにはいぐんしければ氣をうしふふて十はうへぞ落行ける法師武者命をすてゝ追つめ〳〵たゝかふほどにすゑが軍ぜいどもこゝかしこに

てかへしあはせさん〳〵にたゝかふてうちじにする物おほかりけり陶善堯もこまのあしをはためずしてやう〳〵くにへぞ落行ける尼子はかちどきつくつておの〳〵陣へぞかへりける晴久このたび僧等の加勢によつて大利をうるこそちんてうふれそのをんじやうなにてものぞみにまかすべしとの給へば僧等このみ申けるハそのぎにて候はゞ寺領のゝぞみも候はず向後わが宗旨をば妻帯に仰付られて下さるべきよしのぞみ申によつて今度の忠賞にさいたいにぞなし給ひにけるおかしかりし所望と一同こぞりてわらひにけり

義殘後覺巻五

目錄

一玄旨法印咄の事
一碁の手に付る誹諧の事
一諸商人高麗へわたる事
一木蘇城を攻る事
一野島來島喧嘩の事
一高麗國石橋の事
一大内義隆全盛の事
一一忍軒幷北御方最後事付冷泉隆豊勇勢事
一織田源五郎殿落給ふ事
一明智日向守京都の禮を請る事
一京伏見にて比丘尼相撲を取る事

一定一座當か事
一楢崎重兵衛兄弟北條陣勇力事
一四國蜂濱合戰噂事
一日蓮宗々名改る事
一瀬良源内愛宕山にて兵法傳受事

義殘後覺卷五

玄旨法印咄の事

あるとき秀吉公玄旨法印桑山法印清須法印金森法印因幡足定坊ふとめされてよもすから御咄ありけるか太閤仰られけるハおもしろくおかしき雜談ふりともけふよりしてハ腰より下のはふしをすへからすわすれてもこしより志たの事をはなす人は過錢として半金壹枚つゝ當座にいだすべしとそ仰られにけるおの〳〵かしこまつて候とていかにも志んにかまへておはしけるに玄旨申させ給ひけるハきのふひかし山清水寺へさんけいつかまつり候て名譽の道具を見申て候と申させ給ふ秀吉公きこしめしてめいよとハふにたる道具そと仰られけれハさん候祇園の松はらにて折ふしのどかはき申によりて茶屋にてちやをたべ申候ところにつく〳〵と茶釜をみ申候へばてつのやうには見へ申さす候ほどにあやしくぞんしてあの釜はくろがねか唐金かとゝい申候得はちや屋申候ハあれハかねにてハ御座ふく候くすのきのかまにて御いり候と申ほどにあなめづらしとぞんし

そばへよりみ申候ほどにをとろき入申候と申させ給へハ太閤きこしめして木をたくぶらハそれハしりこげて用に立まじきかとの給へハ玄旨うけたまはりて志りハ腰より志もにて候はや〳〵判金一枚御いたし被成候得と申されけれは太閤すてぼうすにだまされたまつひらゆるせと仰られて大わらひ給ひける

碁の手に付る誹諧の事

あるとき一條殿と玄旨法印碁をかこみ給ふに一條殿きれまじき所のきれけれハきれたり〳〵とてもきれたりとたはふれ給へハ玄旨きゝ給ひて

ねはれとももちやのかゝの功者にて

玄以法印　をしふへて日てりにあへる井土の水

藪殿　いり大豆の腹のかわこそむきよけれ

徳永法印　大風の吹にふらりとさくりくも

かやうにおの〳〵たはふれ給ふか玄旨いつれもおもしろしさりなから風にあふても蜘のゑはきれぬものふりとのたまひにけり

諸商人高麗へ渡事

日本こと〳〵く打あけて異國へ渡給ひ又は肥前に秀吉公御座あれハつくしハ時ならぬ春を得て繁昌せりされは京大坂堺近江伊勢美濃尾張かゝ越前中國四國の諸商人高麗へわたりて陣中の御用をたつすへきよし訴訟を申けれハ可然望かふおもひより次第に商賣つかまつるへきのよし被仰下けれハ諸商人めん〳〵に舟をもよほし我さきにとそわたりけるあるひは衣類武具のたくひとてハ旅籠の支度そのほか入用のものともをおもひ〳〵にこしらへて陣中の事ふれハ商人もよろひはらまき弓鑓たち長刀を用としてめん〳〵に志るしを立て兵舟にちつともちがはずこしらへてうんかのことくにわたりけるとて異朝につきしかハ諸大名へまいりてそれ〳〵に旗下にそつきにけり

木蘇城を攻る事

善羅道赤ひくに此くにゝ木蘇王とてまします先鳳城の大きさは凡まわり七里と志るせりされハ朝鮮こと〳〵くうちやふられ本唐へと落行人無量無數ふ

りさるによつて太唐に評議していはく高麗國退治ののちは一定本唐へよすへしこの赤ひ國をハようがいつよくこしらへて本唐漢南高麗の勢をあはせてもつへしと評してつかう十五六萬の勢兵をこめおきたりはしめ加藤主計頭小西森壹岐守鍋島等七八萬の軍勢をそつしてせむるところに城の要害よく行術をつくすによつて若干の人數をそこなふて貴あくむ石垣のたかさ三間につみあけてうへをそさへそらしたりさてうちにはむかふへ三十間斗の水堀をかまへほりのむかふにはからたちをあつさ六七十間かあいた四方に植たりさて矢倉をすきまもふくあけてあかれ(見カ)の見をこしらへてすきふまりくろかねさうを湯にわかして軍勢思ふさま押こませてよき圖に引うけ五十人も六十人も前う志ろよりひかくるによつて疊ほともこれにあたるものハ二言さつかす其場をさらすして志ねるによつて門の内外には死人山をつきて後人いるへきやういなし其外には大筒鐵炮弓をすきまもふくいるによつてあへてのるへきやういふしちからなく陣をひきてこの旨を日本へ委細に志るして言上志けれハ大閤御きき志よくあしく若干の人數をほさせあまつさへ落城せす貴あくむのきこえもつさも諸將の苦身推量せしむ日本勢三十萬騎一同におしかけ無理攻にいたすへし其上にても落去せさるにおゐてハ直に御馬をいれらるへきの間手つよくそんして軍を仕るへきのよし仰付られけれは日本勢手分をして四方より一同に押よせける城のうちにも爰をせんさく命をおしますふせきたゝかふさいへさも八方よりいかりをうちかけ〳〵うんかのこさくにみたれ入いつてもからたちにおさへられけるところに小早川隆景立花左近將監手よりもかちなちへほう火矢を雨のふるはさいかけけれハほさふくもえあかりて一時に野はらさ成にけり是より諸手にも射かくるほさに道ひろくあきしかはおめきさけんてせめいるほさに城中のいくさやふれてくに〳〵のよりせいふれいおもひ〳〵に我さきへさそ落行けるをこゝに追つめかしこにおさへてうちとるものいく千萬さいふかすしらす其中にかこふみは武篇のくにふれは日本勢ともみあひて手いたく合戰をそ志たりけるこの城におゐてハ日本せい手負死人かすをつくしてそ見えにけり

野島來島喧嘩の事

ふさんかいの城を普請志給ふによつて諸國のぐんぜいあつまりけるに爰に毛利家の舟大將野島來島粟屋とてありけるがおりふしあめのいたくふりつゝきけれハつれ〳〵ゐるによつて野島と來島と碁をかこみけるにあはやをはしめとして兩島か一ぞく見物したりけるに來島か與力碁の手を助言しけれハ野しまいふやうは大事の所をいひたまふものかゐ碁は見おとしを利とするものゐるにといひけれハなをきかずいひければ野しま申やう助言つらをはるへしといふ事のあれは一定御へんつらをはらるべしと立腹しけれハなんてうぶよごんすれはとて侍のつらをはられておめ〳〵とすさるべきかといひけれハのじま申やういはれぬ推口つくさんより遠慮し給へかしといへは御へんがはりたるあとよりはれのいでことのほかいたむぞといふによつて野島さつそくに引ぬいてあたまをちやうときつたりけりこはいかにと來島ぬきあはせやるまじとたゝかふところに野島か與力ともおりあひきつてかゝるくるしまかよりき同心たてわかつて入みたれさんこみたちにきりあふほ

とにすは事こそいてきたれとて東西ひしめきけるによつて隆景にくきやつばらかゐ上ゐしにかゝるらうせきつかまつる事こそ曲事ゐれとて人數をよせて兩方ともに一人ものこさすめしとれとてかたはしにおしよせ〳〵とらへ給ふほどに皆〳〵日本へぞにげにけるのちものどもくせ事に仰付られにけり

石橋の事

後のわたりのとき高麗こく大かたせめやふられすでに本唐へと押す處にこゝにせいしやうといふところにいたつて大河ありこれにはしかゝれり見わたすに百八十けんの橋を青めゐる石にてかけたりゐがはしゐるによつて中たかにして馬人のほりかねたり比は十一月下旬の事ゐりけれは橋ハ雪にいてゝすべる事なみゐらすぐんせいこゝにてつかへけれハ大將よりいそき砂をもちかけよとてうんかのことくよせてすゐをまかせてこれをあしたまりとして諸軍勢をぞとをしにげりこゝをうち過て三里ばかり行けれハ此川上と見へて大河のありけるか舟わたしゐれどもときにあたつて舟をあげけれハせんかたゐしとて朝鮮人をよせて此河はいかほどふかきぞ

とといけれは常ハ千石舟のかよふほどなるふかさなりされとも十月よりかんドて此川こほりはりつめて水のながれたへせり云人のわたりてハいかゞとといけれはあかつきよりわたり給ひて志かるへし日のいでたまはぬうちは苦しからじと申によつてさあらはとて又これにも氷の上へすゑをまかせてはやくわたれとて夜中時分よりおしわたすきことに深淵にのそんてはくへうをふむとあふなき事のたとへにひきけるかこれこそぢこくの上の一そくとびなれはやくわたるものこそけがハあるまじけれといふほどにもつともとて我さきにと押わたしけりかくて後軍ハ夜明になりてわたしけれハ人のあしほとなりにやさしものこほりもとけかゝりてのり馬なとハ氷をふみぬけたちすく見になりて志にけるも多かりけり心苦ともあはれともいふばかりなき有様なり

大内義隆全盛の事

爰に中國周防の山口と云處に大内多々良の義隆といふ士ありこの人の先祖ハ百濟國のあるし琳聖太子の後胤たりはしめて本朝にわたり筑前國たゝら

の濱にうちあかりけるよつて則たゝら氏とす陶山口といふも同姓なり志かるに此よしたか文武二道の器量をうけ仁義の士にてましますにより君臣ともに大切におほしめして太宰大貳帥の中納言に任せられ防長兩州豐後筑前四ヶ國をあておこなはせ給ひて九州の成敗をつかさどるされハ周防の山口高の峰に城郭をこしらへ四ヶ國の志よさふらひを引よせ日々に出仕をとげさせ給ふ志かのみならす京都より公家門跡を請せんがために都をうつさんとて一條より九條までの條里をわり在家のありさまきらをみがくされは諸國の商人せうばいのために山口へ到來してはんじやうする事ときならぬ春をえたりこゝによしたかの臣下に陶尾張守隆房といふものあり執權をたまはつて威を西國に馳すいきほひ天につかゆるときんばかならす下る氣あるならひにてほんぎやくのこゝろいてきけるこそはかなけれさるによつて謀叛計略のために虛病をかまへおのが居舘富田の若山へひきこもりひそかに杉右田青景鷲津等をまねきて山海のちんぶつをこしらへてもてなす事なゝめならずかくて氣色をうかゝひ申けるはおの〳〵へ申だん

すべき事ひそかにあり随分それがしよしたかこうへ忠をそんするの處に如何ふる
天魔か入かはりけんそれかしを初さしておの〳〵までをほろぼし給ふへき御内
談の候其子細は相良遠江守武任よし
し一ツになつて大内ごのをほろぼすべき隠謀のくわだてあり御存知ふきやと告
るによつてよしたかひそかに大軍をそつし不日にわれら御身たちをほろぼすべき
用意ふりつみもふくしてうたれん事は口惜かるへしそれかしは思ひたつて一矢
射かけてよしたかをうちまいらせて豊後の大友の御舎弟義長を申請大内ごの
とあふぎたてまつらんと思ふはいかゞといひけれいなの〳〵一往の思慮にもおよはす
同心するこそはかふけれ陶は大に悦てさあらはさて廻文をふすところにつき志
たかふ者ともにハ豊州筑州に加玖源介ちやくし與次太夫阿曽生彌五郎
太宰少貳千壽丸防長にてハ内藤隆世三浦監物弘仲三河守を宗徒の侍と
してつかう二萬七千富田のわか山へぞ着陣すされハこゝ露顯するによつて陶
かいろの子に深野彈正ふさたか宮川左右衛門房勝尾張守に向てなみだをふ

かし申やうこの御むほんはひごへにたかふさの胸中へハ天魔がいるさ存る先こゝろ
を忘つめてきこしめし候へ御養父道善入道ごの君臣の禮儀たゝしき事みやこ
までもかくれなし一子にておはしますに善太郎よしきよさいかく優長におはし
けるによつて大内殿大切におぼしけるに事たにこゝろふり忘かるを道善入道あると
き善太郎ごのをめして大内ごの御尊をさはせ給ふによしきよ殿よしたかの御
行跡よろづにつけてあしきさまに申さられしかは道善一定きやつはそれかしふか
らん跡にてむほんすべきものふりこおぼしめしてふさけふくも御近所の侍に仰付
られてうち果し給ふ是を人々きゝつたへて勿論わか子をうつ臣下も和漢にある
ふらひさはいへども或ハ主君の身かはりに或ハ目前のあくぎやくを見てこそうつ人
もあるにこれはふにの科も見へすたゝするをかいみて一子を王のためにがいし給ふ
事つゆに臣下のうへにいまたきかすと風聞をせし事君ハ忘ろしめされすや其後
貴方を見たてゝ養子さして御ほうこうにいだされよしたかの御をん厚重にかう
ふらせたまひたちまちむほん忘たまハゝ王君のてんばつ養父のいきごをり草のか

げにてもふかゝるべしさあらむときにハ三させをへずしてほろびたまハん事うたがい
ふしたとひうらみは山ふりとも主君なれば一たびはかんにんあつて然るへしとた
つて諫言ゑたりける尾張守大きにいかつてかほどに國をうごかし多勢をよせて
ふにの分別いたすべき明日はならくにゑづむともこのぎにおゐてハとまるまじと
色をそんじていかれは深野宮川いひけるハかふらす國家をめつせんとてハ忠臣を
がいせりひかんハむねをさかれ伍子胥ハ刑にあへるハ先蹤ふれハちからふし三とせ
がうちにハこのいさめをおもひあたり給ふべしいざや宮川とて深野はたちまちさし
ちかへて死したるをおしまぬ者ハふかりけり陶はこれを見けれとも運のつきぬるう
へふれハよし〳〵是非ふき次第ぞとて多勢をそつして山口へそむかひにける

一忍軒并北御方最後の事付冷泉隆豊最後事

義隆公は士卒をあつめて見給ふに冷泉天野佐波園申（本マヽ）等を初として三百ふ
らでハふかりけれは雜兵をあとにとゝめて三百を引ぐし瀧の法泉寺へをち給ふ
それよりも又大寧寺へおち給ひて心ゑつかにじがひせんとて和尚を尋給へハ則

靈雪和尚出給ふゑはらく截斷ゑたまひて天野藤内かいしやくつかまつれと
腹十もんじにきり給ひて天野を急度み給ひ正當恁广ものとき如何藤内うけ
給はつて捲荷忽微風にふれられ瀉げす清香の露一盃とこたへもあへす御首をそ
給はりける御ちやくし三位の中將照隆十三にてじがひし給ふ中にもあはれ
ふりしハ持明院入道一忍軒にておはしますたゞ一人のひめ君をよしたかどのへ
まいらせ給ひはる〳〵さいこくのかたまで下させ給ひてすでに十かねんにおよふ
まで御たいめんふかりしかば御はゝうへもいかばかりかおはしますらんとおぼつか
なくてくらさせ給ふがをり〳〵のぼるは文のかよひばかりをげんさむのこゝちと
し御まごたちあまたいできさせ給ふといへともみゝにふれさせ給ふばかりにてつゐ
にたいめんふかりしかば一忍軒はことしハ思ゐたちて防州くだりむすめやまごど
もにげんざんせんとて過し春のころはる〳〵下らせ給へばひめぎみもまごたちもい
つしかなつかしくむつまじげにてけふよあすよとくらし給ふほどに月日のたつハ
水のふがるゝこゝちにて秋もなかばにはやふりぬかゝるうちにむほんいできてかやう

に一もん一時にほろび給ふ事のかなしさあはれさいふもあまりあり一忍軒も御
まごと一志よにげがひ志給ひけるきたの御かたは御子二人めのこもろともにふか
き淵へ御身をなげてはかなくふらせ給ふ冷泉隆豊はせいりきすくやかにして文
武の士にてましますが最後の軍をしてみせんとて大寧寺へよせくるてきを大も
んひらきうつていではじめは矢たねをつくしていてをさしつきぬれは三尺八寸
のうちものぬいて多勢をわりたて八方へめんにうつてまはり給ふほどに手負死
人はもんうのちそこにさんをみだしたるがごとく ふりさしもにきほひかゝりたるが
うてきふりさいへどもたかごよ一人にきりたてられ門外さしてぞにげたりける罪
つくりにいつまでいくさをすべき君のおそしこ志でのやまにてまち給ふらんさいそ
くべしとてふつだんのまへにてがつしやうしてはらかききつてうせ給ふをおしまぬ
人はふかりけり御志がひを見けれいたんじやくなのごとされたりよみて見侍れは辞
世とおぼしくて

みよや立けふりも雲もふか空にさそひし風のあさものこらすこかれたりさす

か黄門定家のきやうのふかれとはいひながらかゝるおりふし歌よみ給ふべしとも
おぼゝざりしに家風さいごまでのこされたるこゝろざしこそあはれふりこかんせぬ
人はふかりけり

織田源五郎殿落給ふ事

都の住人さて老門のいはく信長公は本能寺にてうせさせ給ふその本能寺さい
ふは西洞院ざをり三でうより下へ二町め西頬にて表にはにしのさうぬん川をうけ
たり其比はあたりに家もふく所々一ツ屋のごさくにありしふり後に沙汰するほど
をきけは明智ざのあたご西の坊にて祈禱のためさて連歌を興行志給ふさるほど
に紹巴西の坊は日向守發句をいだし給ふ事いまや〳〵ご待給ふほどにやゝ志
はらくありて明智ざの本能寺の堀はいかほどのはゝそざの給ふ紹巴も西の坊も
あきれはてゝ此殿は發句をいだし給ふかごおもへは藪の中からぼうをつき出すやう
なる事をいひ給ふものかふご思給て紹巴ふにご仰候やご申給へは明智ざの口に
手をあつるばかりにておはしけるごなりはたして後にそ人々思ひあはせけるこご

はりなる連歌はよせごとにて責口の手つかひをあんじ給ふによつてなりそのゝち日向守

時は今天下しるさ月かなといへり後に秀吉公紹巴はすでに連歌の宗匠たるものがこの發句をしらでうか〳〵と百歌したつる事こそ曲事なれとて三井寺へひつそくさせ給ふ一年ばかりありてめしかへされ連歌の師匠にし給ひけるなりさるほどに六月二日未明に一萬のぐんぜいときをつくつてせめかくるほどに上京のものどもいなにやらん地なえのするハふしきなりとて少々をきあがりて見まはしけれども何事もさだまらずかゝるうちに下京より子をさかさまにおいとしよりを引たて女ばらなきさはぎてうんかのごとくにげまとふ二日のよの事なれハきはめてくらくとうざいもわきまへず上を下へとぞもてかへしける信長公のさふらひ衆も町屋に宿をとりしほどにあるひハ一條小川或ハ六條高辻あたりなどにおもひ〳〵に打ちりて宿せしほどに後にかけつけてけれどもいくささんじて大かた手に合ざるとなり角て本能寺やぶれてけれハ二條御池の御所に城之介どのおはしけれハ明智はすぐにこれへをしかけたり二條の御しよと申ハ室町となり二條より一町下にて有けれは本能寺へは五六町のあいだなれハせめあふそのこゑハ手にとるやうにきこえけるほどに城之介殿諸士をめしていかゞせんと評議ありけるに一方にハまづ安土へをちさせ給ひて勢をもよほして光秀をうたせ給へと云又一方にはかやうにせめたてまつるほどにてハ内内その手あてをつかまつり候ハんまゝ坂本の城に明智彌平次をさしをくべしさあらハ雜兵の手にかゝりたまハん事うたかひなしたゝ本能寺へかけつけて思ふほどはたらきて討死したるがましならんといふかたもあり又織田の源五郎とのハ城之介どのにとかくはハらさかせんきなりかくいふうちに敵ハちかつき候ハんはや〳〵御はらめせとすゝめ給ふほどにもつともこの義より外は有べからずとてじがひの用意しを給ふうちにはや雲霞のごとくよせにける上下二百ばかりの人〳〵ふせぐひまに源五郎とのハあづちをさしてぞをち行給ふさて城之介どのじがひましませはありあふほどのものどもみな〳〵義死をぞとげにけるあハれなりしありさまなりさるほどに源五郎どのなにの

さまたげもふくあづちに付たまひけれハ京わらんべどもこれをきゝて歌につくりて
うたひけりをだの源五ハ人てハないよ御はらめせ〳〵めさせておいて我ハあづちへ
にくる源五むつき二日に大水いでゝをたのはらふる名をふがすと云事を子ども
のかいかうにつふつけてあそひ〳〵これをうたひしと

明智日向守洛中禮を請給ふ事

かくて日向守光秀は明日西國へ出陣ふれハ京町中の者ども御禮にあがるべし
則東寺の四ッ塚にて請給ふべしとありしかばかしこまり候とておもひ〳〵進上
をぞいたしけるあるひハまんぢう粽もちのたぐひあるひは樽肴菓子ふどをあぐる
もありけり又一方にハいや〳〵さやうのたぐひハ世も静謐におさまりたがひに上
下ふどをぶんじやうにちやくして御館にてうけ給ふときにこそハしかるべけれす
でに甲冑をよろひはたさし物にて馬武具東西にはせちがひくろけぶりをたてゝ
志かも鳥羽の野はらにてうけさせ給ふ禮ふればたゝほしいひふどこそ志かるべけれ
とて引飯をつみあげてまいらする者もおほかりけりさるほどに日向守四ッ塚に

柴机を立させおはしまし此進上を見たまひて引飯まいらせたるをハ心得たるも
のもあるものかふとて殊外よろこひ給ふそのゝちの給ひけるは洛中の禮を請て志
るしなくハ有べからすとて向後町中の地子役をゆるし置との御諚ふり各あり
がたしとてよろこひいさみて歸りける

比丘尼相撲の事

京伏見はんぶやうせしかば諸國より名譽のすまふども到來志けるほどに内野
七本松にて勸進すまふを張行すくわんじんもとの取手にハ立石ふせ石あらふ
みたつふみ岩さきそりはし藤らふ玉かつらくろ雲追風すぢがねくわんぬきふど
をはじめとして都合三十ばかり有けりよりには京邊土畿内さてハ志よこく
の武家よりあまりてとりけれどもさすかに勸進すまふをとるほどのものふれハいつ
にてもとりかちけり寄手の人〳〵こはくちをしきかないかふる人もあらばもとめ
て取おほせたくこそ存づれふどぎしける處にある日立石せきにいづるとき行事
申けるは御芝居にすまふハつき申候やもし御望のかた御座候ハゝ只今御出候へ

さらばふのり申とよばゝりけれどもいでんといふ人壹人もなしかゝる處にねずみ戸よりもしばらく相撲をはまち給へ御のぞみのかた御座候と申ほどに行事そのぎふらハはやく御出候へと申けれハいでにけり人〳〵何たるいかめしき男なるらんと見る所にとしの比はたち斗なるびくになり行事こハいかなる人ぞと申けれハ比丘尼申けるはさん候我ハ熊野あたりの者にて候が常にわかき殿ばらたちすまふをとらせ給ふを見および候によつて人〳〵とらせ給ふがうらやましさにまいりて候女と申比丘と申似合ぬ事にて候へハれき〳〵の殿ばらたち並居させ給へばはつかしくこそ候へと申けれハ芝居中是をきゝてみれハいとやさしきあまなりかゝる中へかやうの事をいふてすまふをのぞむハいかさまきゝもをよばぬふしぎかないそぎあはせ給へといひけれハ立石申けるハかやうのびじやくなるものハ十人も十五人も一つまみづゝにすべきにいかでそれがしおとげなくもとるべきぞわかき小ずまふの候ハんにあはせ給へといひけれハ比丘聞ていや〳〵とる程ならば勸進本にてうねすまふをいたし給へさなくばとるまじきと申見物のきせんこれをきゝてまことにおもしろし立石とれと一同に所望しければちからなく取にけるさてびくにかたびらをぬぎていでけるをみれハ下には島のかるさんをぞきたりける行事すまふをあはするとき立石大手をひろげてやつといふてかまへけれハびくにハつつと入てあをのけにぞつきたをしける芝居中是を見てあきれはてゝぞほめたりける立石くちおしくおもひなめ過てまけゝると思へハこんどハ小躰にかまへてかゝる所に比丘ハつゝとよりけれハ立石弓手のかいなをとつて三ふりばかりふりけるかふられてびくハうしろすねのおつとりをとつてうつふさまにぞなげたりける芝居中ハときのこゑをつくつてわらひけるほどにしばしハなりもやまざりけるそれよりもふせいしくわんぬきなどいでゝとれども後次第にびくにがなげぐちハでんくわういなびかりのごとくにいかゝとるやらん目にも見へず手にもためずぞとつたりけるかくてすまふハ此びくにせきをとられければ芝居ハ則退散それより又伏見にてくわんドんすまふありけるに又このびくにいでゝとりおほせけり醍醐大さかなどまて行て世にすくれたる大すまふといへはひろひけるほどに世中の人これはたゞものにてハあるまじき

とおそれなのゝきけるが後にきけはかつらき山の天狗おごるをにくみて頭をおさんがために比丘とふつてとりけるときこゆ奇代の事とさたしけり

定一座頭か事

あるとき信長公つれ〳〵ふるをりふし仰出されけるハ予が前にて咄すをきけばよき事もあしき事もさからはすふすによつてものゝ善惡しれずしておもしろからずたゞ氣分のすねたるまつすぐに物をいふものあらばたづねてまいらせよと仰ければかしこまつて候とて人々より給ひてたれか〳〵とあるところに爰にあづちの町に定一と申て四分の座頭有けるふにともふらぬすねものにて殿やしきへ出入かふたこなたとしけれハ是を殿へいだすべしといへハもつとも志かるべからんとていそぎ定一をよひて人々申されけるハふんぢが心すね〳〵志くおもしろきかたぎなるを上にきこしめし及ばれいそぎ罷出すべきの御諚意ふればいで給へ御意にいらハ一夜檢校にふされん事あんのうちぞと申されけれは定一うちうふつきてまかり出にけり信長公御らんじて定一と申座頭ハふんぢが事かと仰られけれハさん候

申聞ばふんぢハすねものゝ最上なるよしさたせりいかにも我にすねてはゞからずはなすべきよし仰られけれハ定一うけたまはつてそれハみふ人のひが事にて候御意のことくにすねものと申は身が事にてハ御座あるまじ定て座頭ちがひにて候べしと申上る信長公きこしめしてさては又者どもめが身がまへの對咲にふんぢをたばかつていだしたるものふらんと被仰てそれさけのませよとて御志やたまはり重て物ものたまはずかへし給ふさて御廣間にて人々御きしよくにあふたるかいかゞとゝい給へばものもいはずきげんあしさうにてまづかへり候はんとて宿へこそもどりにけるそのゝち信長公ハ長谷川菅屋をめして定一といふやつハふにのやうにもたゝぬ座頭をふんぢらハよびよするものかなと仰られけれハ兩人ふにとも御返事申かねてたゞ下々には心のまゝによろづ申侍れども上にはおそれたてまつりて萬事遠慮をつかまつるものにて候はんとぞ申されにけるそのゝち定一にあひたまひてふにとて御へんハ日比はふすやうに仕らで我々まで虛言を申たるやうに思しめしてめいわくせしにと申されけれハ定一申けるハさりとてはおの〳〵の主君にてま

しませども御智恵ハたゞ一かわなりその子細ハすねものにハかくれなしすねよと仰らるゝをかしこまつてすねるときハ御意に應ずるといふものなりすねよとあるをいや〳〵すねる事ハ候ハんずと御意をそむくこそすねるなれ其分別はたらかずして甲斐の信玄をほろぼさんとてだてをめぐらし給ふ事ハ穴鼠猫をねらふにをなじまことに信玄公などハ三世通達の名將にてあたる所はづれず末代の手本になるべき事のみおほしおの〳〵もよく心得給へ慮外ながら果報つきなばいかゞとぞ申ける

楢崎信定兄弟北條陣勇力の事

秀吉公關東北條氏政御追罰として發向し給ふ輝元よりも御加勢として小早川筑前守隆景を大將として五萬の軍勢をぞ下し給ふかゝる所に備中のくにの住人に楢崎重兵衛信定といふ人ありせいりきすくやかにしてそのこつから尋常ならず兵法ハ諸流をきわめ馬の上かちたち世にたくひなかりしかハつら〳〵今度の御ともをあんずるに殿下の出陣なれハ北國五畿内東海道不殘

御ともつかまつれハまことにはれがましゝなんぞ人めにあまるほどの事をして御ともせはやとおもひて綿絹廿一端の大母衣をぞさゝれける出しには七ツ道具柄を三間にこしらへてこれをさす赤をどしの鎧かろげにきなして四尺三寸の太刀をはき二しやく五寸のうちかたな一しやく二寸のよろひとをしめてのわきにさいたりけり白あやしごきてはちまきにむずと志め我にをとらぬ郎從を二百餘人なかみの鑓を一手にかづかせ前後に追立小早川筑前守本陣のまつさきに立て押たるを諸軍勢ハ見物してたゞいこくのはんくわいといふともいかてか是にハまさるべきと陣をわつてぞとをしけるこのふぜいを見渡せハたゞ雪山のうごくがごとくなり秀吉公御覽してあつはれ上方勢のかざりかなと御かんハたぐひなかりけりされども楢崎毎日の事なれハ兩眼へ血あがりて朱をときたるごとくなれハ隆景いかゝすべきとあんじわつらはせ給ふがされともくるしからすとてものともせずさゝれにけるされハこの重兵衛舍弟に楢崎吉右衛門尉とて候ひけるかつく〳〵あんじけるやうハ重兵衛東國へ御とも申この母衣武具よろひ已下のお

もさをつもりてみるによのつねふらずこれをさして毎日七里づゝ御馬のさきにたつふらはいかふろてつたうをまろめたるちからふりさもつかれてハ有べからず志かれハそれがしこの草臥をすけばやと思ふがかんぞ舎兄にをさらぬさし物をして下らんと思ひさま〳〵案しけるがまづ重兵衛此大母衣を思ひたちし時おのがちからをためしてみはやと思ふあつたゝみのふるしきを十六でうかさねて大つふにてせおひ月夜にひろき野をあゆみてみるに三里行て三里もどりてみれどもふにともあらざれは是にてハ苦しかるまじとてこのほろをこしらへたりされは吉右衛門尉もらのつもりにおふて十疊敷四方の大からかさをこしらへて丸柱ほどふる杓をこくきつにねらせて出しに一間四方へみたるゝほどに帛を切てそかけたりける其身の出立ハ刀ハのびさやもんのいかれるかたちもかくやさそおもひ志られにけるおさらね郎等二百よにん前後にかこませてすでに居館をうつたつて御城の大手にひかへ舎兄ふらさき大右衛門信景御前に候はれけるにこのよしかくさ申信景すふいち輝元公へこの旨を申あけけれハ藝州きこしめしてもつともこそあるへけれと仰られてさらハ様を見物すへし城中へ入よさの御錠ふり承はつて大もん小門押ひらきてこそ入にける輝元公も大床まていてさせ給ひて御らんありさてもゝ〳〵いかめしきありさまかな信景ハいかふ世にめつらしき兄弟をたくさんにもつかふさ御かんありていそき吉右衛門をこれへあけよさうこさの門出をいはゝんさの御詫なり大右衛門は承りてありがたき御詫にて候ものかふさて則からさなろさせ甲冑帯しながら御前へめされにけるかくて御さかつきいでけれハ藝州仰られけるはいかに信景酒はいかふさん候少々被下候さ申それハ一段おもしろしさ仰られてさんをかへていだせさの御詫ふり承はつてせいゞの丸鉢の七八合も入べう見へたるをそいだされたり吉右衛門たつふりさうけて三さくんてそほしたりける藝州御らんじて器量におふゞたるのみくちかな今一ツさ御詫ふりうけたまはつてくだんのごさく十分にそうけたりける其時輝元公仰られけるハさてもの事にふんそちからわざを看にみせよさの御詫ふり承はつてふにも成さも御望に志たがふべしさ申上けれは志はらくありてひれたる鹿の角ハなきか

ご仰出されけれいかしこまつて候さてひねつの〻五またありける一はんきりをはかんかけにするてぞいたされたり吉右衛門たまはつてあてにさかつきをひかへ弓手にて角のもとくちをおしきつて手一束にほつき〳〵さをるほどに五ツにをつてかんかけにすへてぞいたしければ御前をはしめ伺公の人々これハ〳〵さほめ給ひて吾をこそまかれにける輝元公御かんかきりふく御鑓ふらびに銀子等をそ被下けるありがたしさて御城をまかりたつて東國さしてぞ下られける隆景御よろこひかぎりふくやがて秀吉公へ申上給へば大閤御らんありてあつはれかゝるいみしき兄弟もあるものかふさて御感ふゝめふらず諸國の大名みるほどの人々あつはれやゝしき物かふさほめぬ人こそなかりけりされハ秀吉公壹間の御やすみ日おほひ又ハ雨露のために調法なるたくみを志つるものかふさ一しほ御かんありけるふり

四國蜂須合戰尊の事甘兵衛尉討るゝ事

揖崎十兵衛は兵法におゐてハ其比ハ西こくにハふらびふしご沙汰せり關東北國つくしかたより兵法者許狀をさつて此ふらさきへ來る志かれども一人にても利をうる物ふかりけりあるとき北國かたより兵法者のきたりてこのふらさき十兵衛にたいめんし承り及ひてまいりたるよしを申とき信定馳走し給ひさて兵法のさうだんたがひに志給ふかきたるゑんに氈を敷て兩人はふし給ふさころに手水鉢のもとにさゝんくわの見事ふるが有けるにすゝめの三ツ四ツさびきたつてかふたこなたへつたふほさに十兵衛殿壹尺八寸のわきさしをひんぬいてふさ立さこゝろをきつておさし給ひいかにや御へんもすゝめ一ツさり給へさの給へは兵法者あきれはてゝさても〳〵御太刀のかれたる事にこそふか〳〵うけたまわりおよひたるよりハ秀枝の御太刀すちにこそ候へさて仕相におよはすさをりけるさろほさに秀吉公四國そむき奉るによつて退治ありけるに藝州を一圓にたのませ給ふによつて輝元公三年かゝらせ給ふ殿下の軍代にハ三善治兵衛殿發向し給ふ秀次公の御事さそ與州にハ曽根大津河野城を普請し要害をかたくして相まちける藝州よりは小早川筑前守隆景吉川藏人將監廣家福原越後守廣利を大

將とし三萬四萬の人數をそつしてせめ給ふ討死せむと思ゐきつたるてきふれはふか〳〵つよく命をすてゝたゝかふにより毛利家の人數も若干にほし給ふかくて三とせに成ぬれハ蜂濱のかつせんはしまりけり四國衆も今度をさいこと思へはいつれもはんくわいかいさみをすそのとき小早川隆景はちはまのせんぢんふりしかは二萬計のそふへをといて入みたれ勝負をするに隆景の與力に備後國衆古志木梨久代山内吉見三吉片見丁楢崎宗徒の人々おり立て分捕高名かすをつくす中にも古志清左衛門はつくし陣におゐて武勇のほまれ秀吉公度々にきこしめしをよはれたる人ふりけるか騎馬武者百三十騎こと〳〵く乘はなして無二無三に勝負をすいつれもおとりまさりはなかりけるかはたして合戰はやふれにけり各歸陣ありてそれ〳〵に感狀を給はり恩賞をふし給ふされハふらさき兄弟三人ならひに一ぞく三十人ばかりを大右衛門信景ふるまい給ひて今度四國退治について三とせがあいたかゝりて萬死一生し高名をきはめ疵もこうふらす無事に歸陣すること武運つよきゆへめでたしとてよろこひ給ふさしきふかはにふらざき重兵衛は大右衛門のおとふに黒河兵衛の大夫をこれへ出給へとめされけれハいかやうの事にかとてさしきへ出けるに重兵衛ひざをふをしたまひての給ひけるハ四こくに三年在陣つかまつる内に武具に付衣類につき其外己下の用段おほきによつて兵衛の大夫に度々とゝのへてくれ候へといかほとこま〳〵申つかはし候へ共一度もとゝのへず事をかゝせ申事是しかしふから庶子たるによつてふいがしろに仕るに付てかくのごとし歸陣するにおゐてハこのいきどをりをのぶべきとねん〳〵たくみ候へは各御めんかうふるへく候といひさまに大わきざしひんぬいてたゞ一うちにぞしき給ひける兄弟一もん是を見給ゐてもつとも立腹のだん〳〵至極せりさほとの事ふらハ身にハしらせ給ハでと信景申させたまへハ色々御苦身のうへにさやうの事までも申かね候てたのみがいもなきものに心をつくし候とぞ申されけるさてこの兵衛か跡を點驗して見給ひけるにことのほかたくはへおほきによつてつゐにはすふほにて立かたかるへきものふりとそきこえける

日蓮宗宗名替る事

太閤大政所御追善のために千僧くやうし大法會をこりおこなはせ給ふ其時
諸宗より贈經をたてまつる于時日蓮宗よりをくりきやうを上たてまつるその上
書に法花宗さかきて上たりけれは五山よりこれをかへし給ふ法花宗とハ天台
宗を云えいさんよりは一はんにあかれり法花宗とはこゝろへすと有によつてさあら
ハ書なをし候へしふにさつかまつらんと申けれハ當宗と書へしさあるによつて則
かきかへておさめにけりそれより此宗旨を當宗といへるふり

瀬良源内愛宕山にて兵法傳受事

森壹波守殿に瀬良源内さて兵法者のはんへりけるか家中を不殘弟子にさう
てよにたくいふきやうに沙汰せしかあるさきつくしかたより一方進さて兵法人
の許狀をさつて壹波守さのへきたりけるにおかゝ〳〵兵法のうへにおゐては我壹
人のやうにいひちらすほさに家中二ツになつてたかひにひきをおこしあふほさに
後にはつのりて瀬良さ一方をさゝあらは仕相をさすへしさいふて日をさためて
仕相をそまたりけりふにさかおこたりけん源内志まけて肩先志たゝかにうたれたり

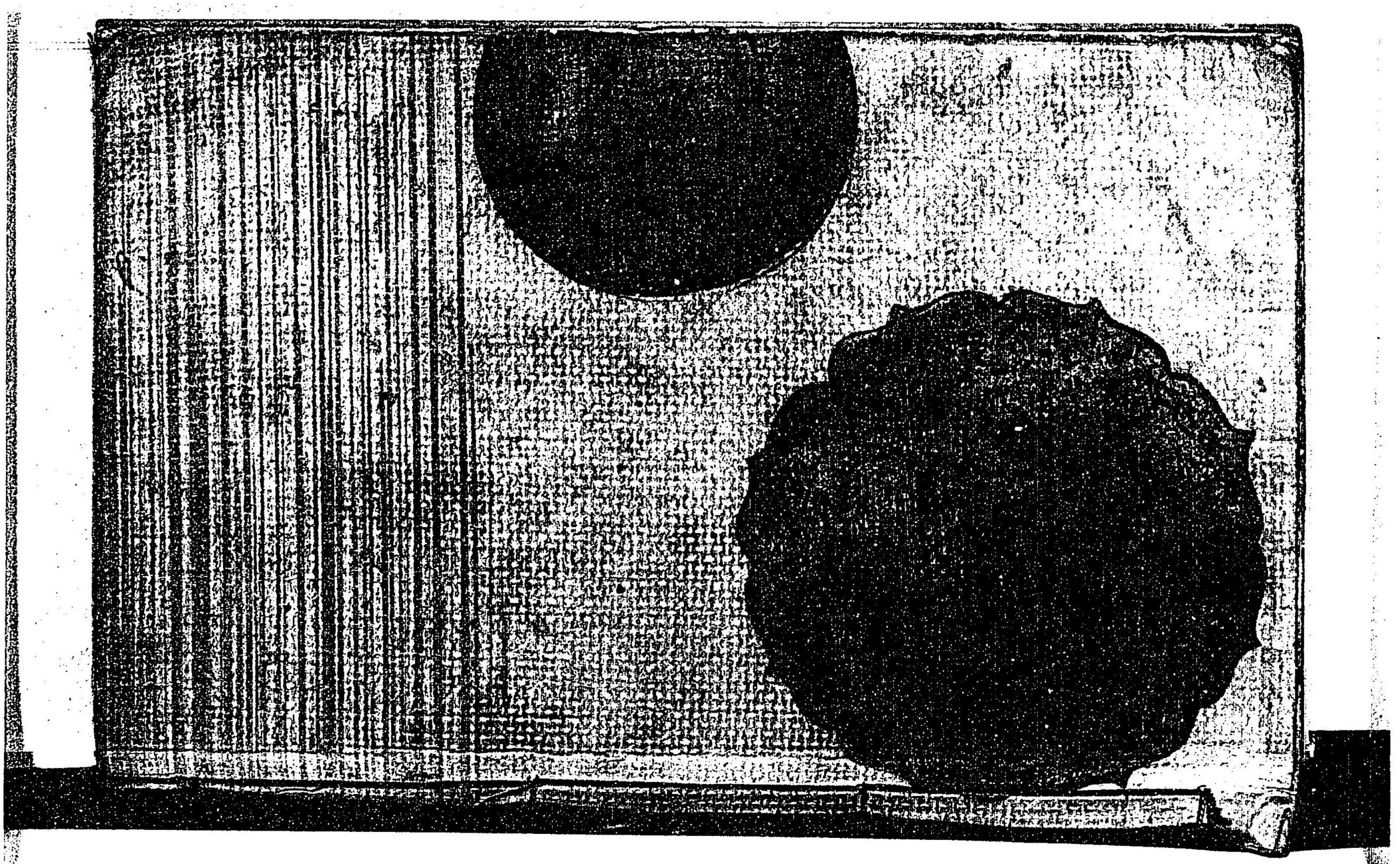
是によつて源内か家中に堪忍ふらすして御いさま給ハつて京都をさしてそかへ
りにけるさて七日斷食をして御たちをさつけて給はり候へさらすハ命をめされ候へさかんたんをくたきいのりた
てまつりけれは七日にまんするあかつきさしの比十五六ふるわかおもものいさやさし
きか源内にうちむかひ給ねてこのころ御へんハふに事によりて是にいおはしけるや
らんさこひ給へはさん候それかし兵法の執心によりてこのほさ是に參籠申さこ
たへけれはそれハやすき事ふりさらはつたへんさあるほさにこゝへかたらけふしさて少
こたかき所に二人うちあかりてこの少人につたへをそうけたりける則この木刀を
御へんにさらするさてけすがこさくにうせ給ひける源内はさてハたゞ今の少人ハ
則直傳のためにへんげし給ふ有がたき事かふわが願むふしからすさてかさねて
禮拜たてまつりてそれよりいそきつくしへそ下りけるさて壹波守さのへまいりて
右の弟子たちにあふて今度くだり候事は先年のち志よくをすゝかんがためにはる〳〵まかりむかひ候あはれ殿へ仰られ候て一方進さ今一たひ志あひをさせて

給ハるべきよし申けれハ右の弟子たちあつまりて今度利運たるにおゐてハ門弟のめんぼくたるべしいそぎとりたてんとて壹岐守どのへこのよし申ければ先年仕負たる事ほゐなくおぼゆるなり利をうべき覺のしかとあるにおゐては急させよどの仰なりかしこまつて候とて瀬良に此よしきかせけれハよろこふ事かぎりなしとて殿よりの仰にて一方進にいそぎ勝負をつかまつれとの仰なれハ一方進先年それがししおほせたるうへハ重てうつに及ばずされとも御意なれハうつべし今度瀬良どのまけ給ハゝそれがしか弟子にとるべきの間其分たるべきかと申けれハ源内なか〳〵今度はたかひに弟子のかために候といひてしあひをぞはしめにけるなにかあらん直傳の木刀にて相傳のたちすぢ無二無三なれハたゝ一もんしにうつてかゝり一方進がみけんをしたゝかわつたりけりこれによつて壹岐守との右の弟子中よろこぶ事かぎりなくそれより又當家に堪忍せらるへしとて加増をなして抱給へハ一方進ハ又本國にかへりける直傳の御太刀がんぜんにあらそふへからす是肝心の徹するところかんおふし給ひて傳給ふ事有難きためしなり

明治二十六年十月廿八日印刷
明治二十六年十月卅一日發行

定價金貳拾錢

編集者　近藤瓶城　東京市小石川區指ヶ谷町七番地

發行兼印刷者　近藤圭造　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

發行所　近藤活版所　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地